フレーベル以後の幼稚園（2）

津　守　　眞

最初の幼稚園教員養成機関　エリザベス・ピーボディの開いた幼稚園は一応の成功を見た。しかし乍ら、ピーボディ自身は、幼稚園のやり方の細部について、自信のない点が多々あり、どうしても幼稚園の元祖であるドイツのフレーベルの幼稚園について直接学ぶことの必要性を感じて、遂に一八六七年に、本場の幼稚園を学ぶべくドイツに渡つた。彼女の渡独は財政的に容易でなく、前に掲げた数多くの彼女の知人達に幼稚園教育の重要性を説いてまわつて資金を集めて、やつと渡独に成功している。此のドイツ訪問によつて、ピーボディは、自分の幼稚園の教授法は本式ではなかつたと感じた。そしてドイツから本式の専門家を招いて幼稚園教員の養成所を作らねばならぬことを感じた。此の間の事情について、ピーボディ自身、次のように云つている。

「最も著名な幼稚園は、ボストンにおける私自身の幼稚園である。しかし、公平に見て、私は自分の幼稚園に根本的な欠陥を認めざるを得ない。フレーベルの教育方法から必然的に約束されるような結果が出て来ないで、彼の非難していたような事柄が生じている。現在の幼稚園は財政的に成功しており、子供達は喜んで来ているが、それに惑わされて、根本的欠陥を見落すことを私はするまい。そこで一八六七年に私はヨーロッパに渡つた。そして一八六八年に帰つて来た。私は我流のやり方とすべてのそれに類似した誤り

を廃して真のものを打ちたてることを熱望していた。そしてその基礎として、幼稚園教育の適当な訓練の必要性を感じた。」（註一）

ピーボディのボストンの幼稚園に附設して幼稚園教育養成所がたてられ、ドイツから渡つてきたマダム・クリーゲ(Madam Kriege)が最初の指導者となり、彼女は当時のドイツにおける最もすぐれた教養と、香高き文化を身につけた女性であり、フレーベル自身の養成所を出て後、イギリスとドイツにおいて幼稚園教育の啓蒙のためにつくした人であつた。四年後の一八七二年には、極めて優秀な幼稚園指導者である。マリア・ベルテ（Maria Boelte）が招聘された。しかしいろいろの事情から、ベルテはピーボディの所には来ないで、ニューヨークで独立の養成所を作ることになる。此の二つの養成所が初期の幼稚園界に尽くした功績は尽大であり、多くのすぐれたキンダーガルトナーを輩出した。私はこれからしばらく、幼稚園教員のことをキンダーガルトナー（Kindervgartner)と呼ぼう。何となれば、幼稚園教員は他の教員の一種ではなく、フレーベルに発したフレーベル主義或いは幼稚園主義とでも云うべき教育理念と、教育方法とを信奉した人々であるから。キンダーガルトナーという言葉は、現在でも尙、幼稚園教育に従事する人々に、或る種の誇りと見識を感じさせているものである。マリア・ベルテは最もすぐれたキンダーガルトナーであり、後に述べるスザン・ブロー女史などもここから出ている。

此らの初期の幼稚園や、養成機関については具体的に内容を知るべき資料は殆どない。ここに、一八七三年頃のピーボディによるボストン幼稚園の仕組みを参考のために掲げておこう。

Ⅰ　幼稚園部、Aクラス、三―四歳児、Bクラス、五―六歳児

Ⅱ　中間学級、六歳以上の児童

Ⅲ　高等学級　十二歳以上

Ⅳ　師範部、キンダーガルトナーとしての二十名の女性（註二）

初期の出版物と展示会　一八七〇年以後、幼稚園の数は頓に増加した。養成機関からは毎年キンダーガルトナー達が、新らしい幼稚園運動のために社会に出てゆき、大衆の眼は幼稚園という新らしい運動に向けられ始めた。丁度そういう時機に、一八七六年、フィラデルフィアで国際博覧会が開かれたのは幼稚園運動普及のために好都合であつた。幼稚園は恩物、手技、子供の製作品などを出品した。フィラデルフィアの孤児院に附設された幼稚園（the Northern Home Kindergarten.）のミス・ルース・バリット（Ruth Byritt）は、実地保育を行なつて最大の好評を博した。こうして人々は幼稚園という言葉にも慣れてきた。此のフィラデルフィアにおける万国博覧会には、日本からも恩物その他が出品されたことが日本の幼稚園史の中にも見えている。

これより前、一八七三年には、幼稚園に関する最初の定期刊行雑誌、「キンダーガルテン・メッセンヂャー」（Kindergarten Messenger）が出版された。これはエリザベス・ピーボディが多くの人々から幼稚園に関する質問を受けて、それに答えるために始まつたものである。ピーボディ自身、次のように書いている。「書面によつて幼稚園に関する解答文を求めて来る人々が非常に多くなつてきたので、私は、此の問題に関する雑誌を編輯すれば、より少ない労力で、より多くの満足が直ちに得られるだろうと考えた。」（註三）此の雑誌はピーボディの私費によつて賄われていたが、財政的困難を来して、一八七六年に New England Journal of Education に合併されたが、此の雑誌の編輯方針にピーボディは満足出来ず、その翌年、W. N. Hailman の編輯による New Education に合併されて、その中の一部として数年間位置を占めて来た。

初期の幼稚園の特徴　草創期における幼稚園の特徴として二つのものを挙げることが出来る。第一は、フレーベルの精神が尊重されたことであり、第二は博愛主義の精神によつて幼稚園教育が啓蒙されたことである。

㈠　新らしく紹介されたフレーベルの精神は、まだ後半に見るように形式化し、涸渇していなかつた。新らしく出発した幼稚園は、当時の小学校或いは中学校教育には見られなかつた新らしい教育分野をとりいれた。手工、絵画、音楽、遊戯などは未だ小学校の課程の中にはないものであつたが、幼稚園はそれを専ら中心的なものとしてとりいれた。それは当時としては極めて大胆なことであつた。後半幼稚園の改革者の首領となるバティ・ヒルも、「幼稚園はその初期において、既に一世紀進んでいた。」（註四）と云つている。

初期の幼稚園は、旧い教育の伝統である、強制的教育法に反対し、子供自身の自発的活動の重要性を強調した。そして学校は形式的に3R（読み方、書き方、数え方）を訓練する所ではなくて、各人の個性を展開させる場所でなくてはならないことを主張した。勿論此のような考え方が人々から理解されるのは容易なことではなかつた。ピーボディ自身、次のように云つている。「子供達が幼稚園に来て得るものを、正しく両親に理解してもらうことは極めて困難である。彼らの頭には、教育とは読むこと、書くこと、それから印刷された文字によつてあらわされた事実を学ぶことである、という考えがつきまとつて離れない。両親達は彼らの子供達がどれだけのことをそらで覚えて反唱することが出来るかということを考えるが、忍耐や根気の習慣、注意力の習慣、事物の観察、明瞭な言語表現というようなことは考えようとしない。所が此の後者のものこそ、幼稚園教育によつて養なわれるものなのである。彼らは、九々の形をとらなければ、数や数関係を学ぶことが出来ないと考えてい

る。」(註五)

フィラデルフィアの万国博覧会には、前に述べた、ミス・バリットの幼稚園の実地保育の隣に、ミス・クー(Miss Coe)の指導による「アメリカ幼稚園」と呼ばれる実地保育場があつた。そこで行なわれていたミス・クーの教育は、専ら読み書きの教育であつて、幼稚園の教育原理とは違つたものであつた。エリザベス・ピーボディはそれを「馬鹿げた模倣をこととする学校であり、そのような型通りの模倣こそ、フレーベルは謬見と考え、蛇の惑わしとして忌み嫌つたものである。」と云つている。そして更に続けて、「ミス・クーは、彼女独得の新らしい方法を発明したのに、何故新らしい名前を発明しないのか。そして彼女の学校と、我々の幼稚園とを混同して、敢てフレーベルの教育改革の本旨を冒そうとするのか。」(註六)と皮肉と共に非難している。

㈢ 博愛主義。時は正に十九世紀の後半であつた。米国の社会は南北戦争を機として社会的変転期を迎えていた。産業面の急激な膨張と共に、社会そのものに対する認識が大いに進歩した。奴隷解放運動に見られるようなヒューマニズムが抬頭し、ヒューマニズムにもとづく運動が各処に展開されたのも此の時期の著しい特徴であつた。神学の面でも厳密な形式的教義に代つて、宗教の社会的応用という面が強調され始め、社会の向上ということが宗教の重要な問題としてとり上げられるようになつた。そして社会の人々の関心も漸く社会の向上ということに向けられ始め、貧者の生活条件の改良、廃疾不具者の救済、貧困児童のための教育などを目的とする種々の形の社会的機関が設立された。これらは主として博愛主義による慈善事業団体の活動であり、幼稚園運動もこれらの活動に負う所が大きい。此の点は次章において更めて取り上げよう。

註一 Elizabeth Peabody : Development of the Kindergarten, In Kindergarten and Child Culture, Ed. by Henry Barnard 1881, p.5～16

註二 Henry Barnard ; Boston Kindergarten Training Class, In Barards Paper op. cit, 1881 P. 559

註三 Elizabeth Peabody : Editorial. Journal of Education, Boston 1876, III, 9.

註四 Patty S. Hill ; Kindergarten of Yesterday and Tomorrow. National Education Association, 1916, P. 294～297

註五 Elizabeth Peabody ; Letters to the Boston Meeting of Kindergartners, Journal of Education, Boston 1876 III, P. 21

註六 前掲書 P. 297